

血液型不適合造血幹細胞移植後IgM抗体関連溶血性貧血の予測・早期診断法の確立

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2021-07-12 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24517/00060699

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



[◀ Back to previous page](#)

血液型不適合造血幹細胞移植後IgM抗体関連溶血性貧血の予測・早期診断法の確立

Research Project

Project/Area Number	24931019
Research Category	Grant-in-Aid for Encouragement of Scientists
Allocation Type	Single-year Grants
Research Field	臨床医学
Research Institution	Kanazawa University
Principal Investigator	佐藤 英洋 金沢大学, 附属病院, 衛生検査技師
Project Period (FY)	2012
Project Status	Completed (Fiscal Year 2012)
Budget Amount *help	¥600,000 (Direct Cost: ¥600,000) Fiscal Year 2012: ¥600,000 (Direct Cost: ¥600,000)
Keywords	Passenger lymphocyte syndrome / 溶血 / 抗体産生

All

Research Abstract

ABO副不適合造血幹細胞移植後早期に、ドナー由来B細胞がホストABO抗原への抗体を産生し、一過性免疫性溶血を来すことがある(Passenger lymphocyte syndrome ; PLS)。

従来、PLSは直接グロブリン試験を用いて診断されてきたため溶血は主にIgG型抗体の関与が考えられていた。一方でIgM型抗体の意義は十分検討されていない。本研究でABO副不適合造血幹細胞移植例でホストABO抗原に対するIgG型およびIgM型の抗体価を経時的に測定し、PLS発症の臨床病態を解析した。これまで25例のABO副不適合造血幹細胞移植を解析し、5例でIgG型、IgM型の抗赤血球抗体を一過性に検出した。3例はIgM型抗赤血球抗体が先行して出現し、2例はIgG型とIgM型を同時に検出した。ABOの組み合わせはA型のホストにO型のドナー3例、発症頻度25%とB型のホストにA型のドナー2例、発症頻度66%であった。

移植後中央値19日(13-19日)に臨床的に溶血がおこり、中央値5日間(3-11日間)で軽快した。全例で赤血球輸血の必要量が一時的に増加した。臍帯血移植症例での発症例はなかった。全例でGradeII以上の急性GVHDを続発し、全身性ステロイド治療を要した。

IgM抗体を産生しながら重度の溶血を起こさなかったのは、IgG型抗体が低力価で推移したことが考えられる。IgM型抗体は、IgG型抗体よりも早期もしくは同時に出現し、IgM型抗体の測定は、PLSの早期診断に有用であると考えられた。

Report (1 results)

2012 Annual Research Report

Research Products (3 results)

All 2012 Other

All Journal Article Presentation

[Journal Article] 赤血球A・B抗原減弱血液疾患におけるI抗原発現低下:フローサイトメトリー法による血液型鑑別の可能性

▼

[Presentation] 骨髄破壊の前処置移植後IgM型赤血球抗体によるpassenger lymphocyte syndrome (PLS)

2012 ▼

[Presentation] ABO副不適合移植後ドナー由来IgM抗体による免疫性溶血を伴うパッセンジャーリンパ球症候群

2012 ▼

URL: <https://kaken.nii.ac.jp/grant/KAKENHI-PROJECT-24931019/>

Published: 2013-05-31 Modified: 2019-07-29